

「祈りとみことばの宣教」 コロサイ 4：3～4

I 「同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています」：3

1. パウロは、人々の為に心から祈り支える事を大切にしていた。と同時に、自分自身も祈りの支援がどんなに力あるものであるかを、身をもって体験して来たパウロは、心から「私たちのために…祈ってください」と懇願する。パウロは、豊かな賜物が神から与えられていた。経験も積んで来ていた。しかし、彼は、自分一人で主の為の働きができるとは、少しも思わなかった。いや、彼が信仰の年数が長くなり経験を積み重ねるほどますます謙遜にさせられた。また、悪魔の妨害を体験した。それゆえに、偉大な神の助け、働き、導きがあるように自分で祈るだけでなく、キリストの体である教会に、兄弟姉妹に祈りの支援の要請をした。彼は、心を合わせた祈りの支援のある所に、偉大な神、御聖霊の働きがあることを心から信じまた認識していた。

2. 私たちも、祈りの要請を兄弟姉妹にしたい。また、私たちも、兄弟姉妹のために、家族知人への福音の広まりのために、試練の中での支えの為に、また全世界に遣わされている宣教師、働き人の為に心から祈りたい。「私の祈りなんかあってもなくても変わらない」と思ってはならない。祈りは働き人たちの大きな支えとなっている。子供メッセージや礼拝メッセージ、ゴスペル教室のメッセージの奉仕者のためにも益々祈り支えていただきたい。悪魔の妨害があっても、祈りの支えは何という大きな力であろうか！

「モーセが手（とりなしの祈り）を上げているときは、イスラエルが優勢になり、手を降ろしているときは、アマレクが優勢になった。しかし、モーセの手が重くなった。…アロンとフルは、ひとりはこちら側、ひとりはあちら側から、モーセの手をささえた」出エジプト記17：11-12

3. パウロは、福音のために牢に入れられているという逆境にありながら、主の栄光と福音の宣教を大胆に優先させ、自分が果たすべき務めを最善に果たせるように祈りを要請している。それは冷たい義務感ではなく、主に愛され主を彼も愛し、主と福音のことを心から喜び、また、神がいのちをかけて愛されている人々を彼も愛し、人々が滅びないで主を信じ救われて欲しいという願い、情熱、愛があったからである。「私としては…あなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです」（ローマ1：15）。私達も祈りたい。「あなたは初めの愛から離れてしまった」（黙2：4）という状態にならないように。主がどんなに愛し続けて下さっているかを思い、心から感謝したい。たゆみなく愛と魂への情熱を祈り求め、主からいただく愛を実践し、福音を振舞い、香り、言葉で伝えることができるように。すべてを知り見ておられる主の御言葉「わたしは、あなたの行いとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行いが初めの行いにまさっていることも知っている」（黙2：19）。

4. 「神がみことばのために門を開いてくださって」言われている。私たちも祈りたい。世界中の国々で神が福音のために門を開いてくださるように。また、私たちが主を伝えたい家族、知人、友人の心の門を神が開いてくださるように。求める心、聞く耳を与えて下さるように。励ましの御言葉→「主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた」（使徒16：14）。人の分は何か→祈り合う事、愛を実践し、祈りながらキリストの奥義（福音）を語る。人を救うのは、神の分、神のみがお出来になる御業。

II 「私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください」：4。

1. 福音のための門がどんなに大きく開かれても、あいまいで、はっきり語れなかったり、また御霊の御力がなければ人々の心に福音は届かない。「私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたのではなく、御霊と御力の現われでした」 I コリ 2：4。福音を伝える前に「聖霊に満たされるように、聖霊が働いてくださるように」心から祈り合いたい。祈りを積みたい。

2. 「当然語るべき語り方で」。

A. 主の良き模範①「イエスは…彼らの聞く力に応じて、みことばを話された」マルコ 4：33。私たちは、一方的に語るのではなく、相手の聞く力に応じて福音を語れるように祈りたい。②パリサイ人のニコデモ（ユダヤ人の指導者）は自分から求めて主のもとに来たので、主は最初から真理を語られた。ヨハネ 3：1～。③サマリヤの女には、主のほうから語りかけられ「わたしに水を飲ませてください」と好意を求められ、関係作りをされた。その後、真理を語られ、罪も示された。4：7～。④ある金持ちの役人（ルカ 18：18）は、自分から主に質問したので、最初から真理を語られた。「あなたには、欠けたことがひとつあります」と真理を語られたが、そこには真理だけではなく、主の深い愛、いつくしみがあった。「イエスは、彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。主はいつも愛をもって真理を語られる。⑤取税人ザアカイに対して、主は真理、福音を語る前に、「ザアカイ」と愛をもって名前を呼び、「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」（ルカ 19：5）と言われた。つまり、真理、福音を語る前に大切な愛ある関係作りをされた。その人の救いのための愛の祈りと主からいただく愛の実践、仕えることによる良き関係を通して真理、福音を語ることができる。「愛をもって真理を語り」エペソ 4：15。福音の伝え方には、多様性がある。

B. 相手の主義や宗教を批判し、駄目な点を並べて、福音を語るのではない。まず、相手の宗教を批判するなら、相手は、心の門、聞く耳をしっかりと閉ざしてしまう。福音は心に入らない。それは、愛ある接し方ではない。福音を伝える時は、相手の宗教、政治的な考え方を批判したり、攻撃するのではなく、教会、兄弟姉妹に祈ってもらいながら、聖書の御言葉、主の素晴らしさ、主が私たちの救いの為に何をしてくださったか、福音を素直に心を込めて語ることが大切である。聖霊が働かれ、その人が主を信じるなら、主の真の救い、光を受けて、自分が信じていたもの間違いがわかる。御言葉と聖霊様は教えて下さる。

「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい」 I ペテロ 3：15